

氏 名	松 下 薫 一 まつ した くん いち
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 319 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 41 年 9 月 27 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	リンパ内細胞の比較解剖学的知見補遺

論文調査委員 (主 査)
教 授 堀井五十雄 教 授 西村秀雄 教 授 岡本道雄

論 文 内 容 の 要 旨

著者は未分化、未発達ながらリンパ節を有するアヒルと分化発達したリンパ節を有する数種の哺乳類について比較解剖学上の見地からリンパ内細胞についての検索を行なった。

従来のリンパ内細胞の比較解剖学がリンパ採取の部位についての十分な考慮が行なわれていなかったことは指摘さるべきである。

一般に鳥類でも哺乳類でも、リンパ節を経由しない第一次節前リンパは安定性を欠き、比較解剖学上の対象とするに不適當である。

第一次節前リンパはいずれの動物でも部位差の著しいことをあげなければならない。源泉領域にみるべきリンパ組織の存在しない第一次節前リンパは細胞数は少なく、リンパ球系細胞は少なく、リンパ芽球は出現せず、単球が多い。これに反して源泉領域にリンパ組織の発達しているものでは、細胞数は多く、リンパ球系細胞は多く必ずリンパ芽球を含み、単球は少ない。両者いずれの場合も少数の顆粒白血球は出現し、鳥類、哺乳類においても差はない。

第一次節後リンパは安定し、鳥類でも哺乳類でも細胞数は多く、リンパ球系細胞の占める比率は大でリンパ芽球は必ず出現し、単球出現率は低い。また通常少数の顆粒球は鳥類でも哺乳類でも現われ、これをもって両者間の本質的なちがいとするわけにはゆかない。

第一次節後リンパについての鳥類と哺乳類との間の差を求めると、単球出現率が哺乳類では1%以下、鳥類では2~3%という点であるが、これは主としてリンパ節の単球除却能力の程度の差に基づくもので本質的なちがいではない。少なくともリンパ節のやや発達した雁鴨目を例にとれば、鳥類と哺乳類との間には、比較に供すべきリンパ採取の部位の選択さえ適切であれば、従来考えられたような本質的なちがいはない。むしろリンパ内細胞の比較解剖学の見地からすれば、哺乳類、鳥類を一体として、これとリンパ節を全くもたない爬虫類以下との間に深い断層が存在するものと言える。

論文審査の結果の要旨

従来のリンパ内細胞の比較解剖学が、リンパの部位的変動についての考慮がほとんど全く払われていなかったことはじゅうぶん指摘されるべきである。ことにリンパ節の分化発達をみる一部鳥類や哺乳類については、この点の考慮が払われていない研究は全く意義がないと言っても過言ではない。

著者はこの点にかんがみ、アヒル、ウサギ、イヌ、ネコ、モルモット、ヤギにつき、リンパの部位差を厳密に規制して、同一種類のリンパについてその細胞比較を各動物間に試みた。

これによると第一次節前リンパはいずれの動物においても部位的相違による変動が大であって、比較解剖学上の検索材料として不適當であって、従来この種のリンパと他動物の他部位のリンパと比較したような研究は比較解剖学上正当な意義を有しない。

これに反して鳥類、哺乳類を問わず、第一次節後リンパは安定したリンパで正に相互比較の材料に供せらるべきものであるが、鳥類と哺乳類とを比較すると従来言われたような著差はない。わずかに単球出現率に若干の相違がみられる程度であって本質的なものではない。リンパ内細胞の比較解剖学的見地からみれば、哺乳類、鳥類は一体となって、は虫類以下のリンパ節をもたないリンパと鋭い対立を示すものと言い得るのである。

本論文は学術上有益にして医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。